Bulletin of Jumonji College, vol.43, 2012

話し合い後の振り返り場面における話題共有と評価の方略*

星野祐子**

1．はじめに

会話参加者が相互に意見を交わす話し合いは、日常生活のあらゆる場面で行われる。話し合いの形態としては、合意を形成することを目的とするもの、意見の交流により価値観の異同を共有するもの、ディベート的なもの、与えられた項目について順番を付与するものなどがあり、それぞれの話し合いに特徴的な形式、発話機能、談話構造については、既に一定の研究成果が得られている。

また、話し合いのスキルを学ぶことを目的とする学習では、話し合い後に、参加者相互による振り返りが行われることが多い。話し合い後に、自他の活動を振り返り、話し合いのプロセスを共有する活動には、教育効果も認められ、校種を問わず実践がなされている。しかし、話し合いの振り返りそのものが、言語学的な分析対象となることは少なく、振り返りの共有過程や評価の方略については明らかになっていない。また、振り返りの進め方についても、具体的な言語形式や方略についての指導は十分なされていないのが現状である。

そこで、本稿では、振り返りにおける言語的特徴に注目し、効果的な振り返り教育を考える手立てとする。具体的には振り返りの話題共有の過程と相互評価の方略を、談話レベルの観察により明らかにしたい。

2．先行研究

話し合いを対象にした先行研究は多々あるが、ここでは、同一経験後にそのやりとりを振り返る場面に注目した研究を取り上げる。

筒井（2006a、2006b）は、映画を鑑賞した後の二者間会話を取り上げ、映画の評価がどのような発話連鎖によってなされているのかを明らかにした。筒井（2006a）は、評価を共有する際の会話の構造として、相づち型と繰り返し型の二つのタイプがあることを指摘した。続く、筒井（2006b）では、映画内容に関する［問題提示―問題解決―納得］の連鎖が、参加者の話題に対する参与の相違により、異なる構造を持つことが示された(1)。また、筒井（2012）では、

---

* Topic-sharing and Reflecting Strategies in a Post Discussion Session

** Yuko Hoshino　十文字学園女子大学短期大学部　表現文化学科(Department of Culture and Communication)

キーワード：ディスカッション　話し合い　振り返り　コミュニケーション

雑談の研究の一つとして、振り返り場面を取り上げ、他の雑談との構造の違いを指摘し、体系的な研究を行っている。

長田（2004）は、教育的な立場から、大学院生の話し合いの学習における振り返りの有効性を論じる。長田（2004）は、項目に順番を付与するタスクを第１次話し合いとして設定し、第２次話し合いで第１次の振り返りを、続く第３次話し合いで第１次話し合いと類似のタスクを実施した[(2)]。なお、長田（2004）で設定された第２次話し合いは、本稿で注目する振り返り場面と同様の性格を持ち、内容としては、①配布された話し合いの手引と第１次話し合いとの相違、②話し合いの全体計画・時間、③参加者の発話機会の保証、の３点が挙がったという。

同じく、教育的立場からの論考としては、初谷（2012）がある。初谷（2012）では、高校生が行った話し合いの振り返り活動を取り上げ、授業者と生徒が創り出す学びの場から、振り返りを含めた話し合いの指導の観点とその方向性について考察した。

以上、話し合いの研究の中で、特に振り返りに関連する研究を紹介した。振り返り談話の研究は、教育現場の要請もあり、現在までに、多くの実践が積み重ねられている。しかし、振り返り談話に関して、言語的なアプローチがなされているわけではない。たとえば、長田（2004）は、教育的な観点から話し合いに注目した研究であり、振り返りの共有過程や振り返りを行う参加者の相互評価について、言語的な観点からの言及は行っていない。初谷（2012）の研究も同様で、振り返り談話にみられる言語的な要素には触れていない。さらに、振り返りの対象となっている場面は、指導者主導で話題が進められている場面であり、会話参加者による自由な振り返りを設定した本研究のデータとは質が異なる。また、映画鑑賞後の雑談を対象にした筒井（2006a、2006b、2012）の研究では、話題や評価の対象は、映画の登場人物やストーリーについてであり、自分達の言語行動を振り返るものではない。

それでは、自由な雰囲気の中で行われる話し合いの振り返りは、どのような性格を持っているのだろうか。目的を持つ制度的談話でありながら、近しい間柄で自由な雰囲気で行われる振り返りに、他の談話とは異なる特徴を見出すことができるのだろうか。

本研究では、研究課題として次の二つを設定する。一点目として、同一経験における振り返りの共有過程を明らかにする。振り返り談話に特徴的な談話展開、特徴的な表現形式にはどのようなものがあるだろうか。二点目として、同一経験の振り返りにおいて、互いの評価がどのようになされるのか、その方略と相互行為過程を明らかにする。

3．データ

ある大学の教育学部に在籍する学部学生を対象とし、話し合いのデータを収録した。収録期

表１　活動の流れ

	活動内容	時間
①	課題解決型話し合いを行う。テーマは「学部のキャッチコピーを作る」	20分
②	ビデオ記録された①をグループで鑑賞する。適宜メモを取ってもよい	20分
❸	②の観察をもとに①の振り返りを行う	15分

間は2007年７月から８月で、一つのグループは、同学科に所属する同性の親しい友人４人から成る。活動の流れは表１で、本稿では、❸に当たる振り返り場面を分析対象とする。分析対象となったデータ数は、男性４グループ、女性４グループである。

4．分析結果

話し合いの振り返りを行うことがタスクとして課せられた状況下において、話し合いの参加者はどのように振り返りを進展させ、相互評価を行っているのだろうか。以下、話題共有の過程と相互評価の方略に分けて分析を行う。文字化の方法は、論文末に示した。適宜参照されたい。

4.1　話題共有の過程

談話の展開と会話参加者の発話の形態に注目したところ、次の三つのパターンが確認された。

4.1.1　役割固定型

主たる話し手を決め、他の三者が聞き手として振り返りに参加している場面がみられた。これは、一連のやりとりにおいて、役割が固定されている展開パターンとなる。

（１）グループ３（女性）

1	N	１番Sさんから　hh 気づいた点	←　Nによる話者指名
2	S	自分の反省からね　まずね	
3	N	うん	
4	S	気づいた点　常に自分の手をいじってる	
5	K	hhh	
6	S	なんか　こうやっていたり　とか	
7	K	ああ	
8	S	こうやってたりとかやってる　あと　発言を（・・・）　あんまり発言をせずにツッコミが多い	
9	M	[hhh]	
10	N	[hhh]	
11	S	あと　早口？	
12	M	うん	
13	S	あと　飲み物を飲み過ぎ	
14	全員	hhhhhh	
15	S	パック１個空けたからね　あの　話し合いで	
16	全員	hhhhhhh	
17	S	あと　終わった話を盛り返す	
18	N	なるほどね	
19	S	ほぼツッコミの内容で（１）はい	

20	M	あの　こっち[3]はいいの？	←　Mによる発話権存続の確認
21	S	こっちもか　みんな　机の上に腕を置いてる	
22	M	［hhhh］	
23	N	［ああ　確かに］	
24	S	採用されない意見とかでも　結構たくさん出てる	
25	N	hhh	
26	S	くだらない話とか　ポケモンとかポケモンとかポケモンとか	
27	N	ごめん　ポケモンは　もう　控えるhhh	
28	S	あとみんなに質問して話題を広げてたり	
29	N	うん	
30	S	自然にボケとツッコミが成立してたり	
31	K	hhh	
32	S	あと話題がよく巡る　循環がいいなと思いました	
33	N	おお	
34	S	うん	
35	M	え：：とね　姿勢が悪いでしょ　これ自分	

（1）では、1Nの「1番　Sさんから　hh 気づいた点」という発話により、まずはSが主たる話し手として指定された。この発言により、S以外の3人（M、K、N）は、聞き手として振り返りに参加することになる。その結果、聞き手であるM、K、Nは、Sの振り返りに対して、適宜、あいづちや笑いを挿入し、Sの振り返りを共有している。場への参加をあいづちや笑いの提示に留めることは、Sを主たる聞き手として認識していることの表れといえるだろう。

なお、Sによる振り返りは、19Sの段階で、一度結論づけられ（「ほぼツッコミの内容で（1）はい」）、turnの移譲が試みられている。Sがturn移譲を試みたことは、発話終了を暗示させる「はい」[4]が、沈黙の後に現れている点からも理解することができよう。ところが、20Mの指摘を受け、Sは再度振り返りを行うことになる。結局、Sが再開した振り返りは32Sまで続くのだが、32Sには、通常のスピーチレベルから逸脱する敬体が確認され、振り返りの終了が暗示されている[5]。

以上、参加者の役割を固定し、振り返りを行うパターンを確認した。この場合は、参加者の役割が実質的な発話を行使する者と、あいづち的発話を行使する者とに分かれており、実質的な発話を行っている者の明確な発話終了を待って、主たる話し手が交替することがわかった。また、聞き手であるN、Mが司会者的な役割をしており（1N、20M）、主たる発話権の移譲が、明示的なされているのも特徴的である。

4.1.2　話題固定型

振り返りのテーマとなる話題を設定し、それについて意見を交わすやりとりがみられた。このパターンの場合は、主たる話し手は固定されず、会話参加者は、テーマについて、自由に意見を交わすことができる。以下の例では、11Tから44Cまでが話題固定型の振り返りである。

（2）グループ1（女性）

1	S	内容をね　あらかじめちゃんと理解して
2	K	うん
3	S	内容　そのね　だって　みんな考えてる
4	K	うん
5	S	題がバラバラだと
6	K	［うんうん］
7	C	［うんうん］
8	S	まとまんないもんね＝
9	C	＝うん　そうだね
10	S	これは今回は学部っていう（3）あとは
11	T	（3）う：：ん（2）自分のクセとかあるよね　←新規話題「自分のクセ」
12	S	あった
13	K	［あった］
14	C	［あった］
15	S	手が　hh　なんか　3つね　とか
16	C	［hhhhh］
17	K	［hhhhh］
18	S	こんなの　こんなの
19	T	手振り　手振り多かったもんね　みんな
20	C	多かった
21	K	多い
22	S	手振りは　普通に出ちゃうんだけど
23	C	私も［普通にやっちゃう］
24	S	［全然意識しないで］やる
25	T	なんか説明するときに出ちゃうね
26	K	うん
27	T	だって【大学名】とか［やってたもん］
28	K	［hhhhh］
29	C	やってたもん
30	T	なにこれみたいな　でも　［意味ない］けど
31	S	［伝わるよ］
32	K	［伝わる］
33	C	［伝わる］
34	K	インパクトでしょ　みたいな
35	T	そうそうそうそう
36	K	でも大切だよ
37	C	うん　［手振り］

38	T	［手振り］
39	S	手振り
40	K	手振り大切だよ
41	C	それは　いいよね
42	T	う：：ん　（2）　くせ
43	S	［うん　手がね］
44	C	［話し方とか］（3）
45	K	あと　どんどんまとめてった方がさ　わたしは　なんかわかりやすいんだけど　みんなが発言したことを　←新規話題「まとめ方」
46	T	だから　K　は［すごいよ］
47	C	［さすが］
48	T	途中あったもんね　途中あったもんね　ここまで　何が出たっけ：：って
49	S	あった

（2）では、先行の話題に一区切りがついた後、幾度かの沈黙を経て「自分のクセ」という新規話題が導入されている。この新規話題は11Tによって導入されたのだが、Tに限らず他の参加者も「自分のクセ」について自由に振り返りを行っている。ここでは、（1）と異なり、主たる話し手・聞き手といった役割は固定されていない。さらに、（1）と比べて重なりも目立ち、「自分のクセ」という話題の下、活発に振り返りを進めていることがわかる。同語反復もしばしばみられ、それぞれが設定されたテーマに沿って、自由に感想を述べあい、感想を共有していることがうかがえる。

また、話題の連鎖という点から考えてみると、11Tから44Cまでは、話題としての独立性が高く、先行話題と後続話題との間に明確な関連はみられない。それは、10S、11Tにおいて沈黙がみられた後に、話題が導入された点、37Cから43Sにかけては情報の繰り返しが生じ、話題の深まりがみられなかった点からも理解される。

4.1.3　話題派生型

先行話題とそれに続く話題が、緩やかな関連をもって進んでいくパターンがみられた。以下の（3）では、［雰囲気がよい］→［脱線話で盛り上がる］→［まとめ役が必要］→［自分達の参加態度］と話題が進む。主たる話し手を決めずに話題が進展する点は、前節で取り上げた話題固定型と同様であるが、先行話題と後続話題の間に話題の途切れを示すマーカーがない点で、話題固定型と異なる特徴を持つ。

（3）グループ1（女性）

1	S	よかったとこだよね
2	K	うん
3	C	雰囲気とかはよかったよね
4	S	雰囲気はしゃべりやすかった

5	C	ね
6	K	うん
7	C	みんな笑ってるし
8	S	なんか話とかが盛り上がってくると
9	C	［うん］
10	K	［うん］
11	S	どうでもいいこととか言えた
12	全員	hhhh
13	T	確かにね
14	S	でも　まじめなときは＝
15	K	＝そうそう　脱線しても考えるときは考えるよね
16	C	［うんうん］
17	S	［そうそう］（Kを見て）まとめ役なんだよね
18	T	そう　まとめ役がいないとダメなんだと思う　てか　自然とそれができてると思うのまとめ役　Kじゃん
19	C	［うん］
20	K	［ほんとに？］
21	T	どう考えても
22	C	そうそう
23	T	時間を気にしたり　話を戻したり
24	K	［hhhh］
25	S	［そう］
26	T	うちらって　ていうか　わたしは　もう　わ：：ってきたときに　ぽんって入って　あはははって終わるよ＝
27	K	＝でもね　脱線させるのはわたしだったんだよね
28	T	うそ
29	K	結局
30	C	あ　CanCamとか
31	K	そうそう 脱線しておいて［やばいって戻すから］
32	T	［それにのっちゃうから］
33	C	そうそうそう　うちら乗っちゃう

（3）においては、「雰囲気がよい」ことを始発として、「脱線話」にも話題が及んでいる。確かに、よい雰囲気と脱線を許す雰囲気は、表裏一体として捉えることができるだろう。ただ、（3）における話題は「雰囲気がよい」ことのみに終始しているわけではなく、話し合い中のそれぞれの参加態度（18T、26T、27K、33C）にまで及んでいる。先行話題と後続話題が緩やかな関連を持ちながら、話題が展開している例として考えられる。

また、形式面に注目すると、（3）には、気づきの列挙（談話例（1）Sの発話内）、新規話

題の要求（談話例（２）10S）、新規話題の追加（談話例（２）45K）を示すマーカーとして機能していた「あと」が現れていない。振り返り場面における「あと」は、自身のturn保持、あるいは話題提供を他の参加者に望むマーカーとして機能する。そのマーカーが現れなかったことは、話題の推移が緩やか、かつ自然であったと考える根拠となろう。

以上、振り返り談話の談話展開パターンの分析を行った。振り返りの談話展開は、会話参加者の役割を固定することで振り返りが進むパターンと、話題を設定することで振り返りが進むパターンがあることがわかった。後者に関しては、話題の連なり方でさらに二つに分けることができる。なお、これらのパターンは、対立する関係というものではなく、一つの振り返り談話の中に併存することもある。

4.2　相互評価の方略

続いて、「話し合いの貢献度」に注目して、相互評価の方略を考えてみたい。話し合いを振り返る際には、話題展開の適切性、得られた結果の妥当性、自他の参加態度・言動などが評価項目として考えられる。その中で、本節では、特に自他の参加態度・言動を振り返る発話に注目し、相互評価がどのようになされているかを分析する。その際「話し合いの貢献度」という概念を導入し、話し合いの貢献度を相互で調整することで、円満なコミュニケーションが図られていることを明らかにする。

4.2.1　自身に対する評価をめぐって

まずは、自身に対する評価がどのようになされているかを中心に観察する。観察の際は、自己評価に該当する部分のみを取り上げるのではなく、周辺の発話も含めて談話レベルで考察を行う。以下の例では、自己評価に関して、特に注目したい否定的評価を実線、肯定的評価を波線で示す。

（４）グループ５（男性）

1	T	まあ　それとあと、俺みたいに空気の読めてない人が　こう 話の腰を折って発言した時に どう こう 話を　戻していくかっていう　その話の筋のフォローの仕方？
2	M	話の筋
3	Y	あのね　どちらかと言うとね　そのフォローしようとしていたのがね　Tちゃんなんじゃないかと
4	T	ああ　そうです［かね：：］
5	M	［戻そうとね］
6	Y	腰を　折っていたのが　ボクとか：：　あの　まあ　この　この　３人だったのではないかと
7	全員	hhhhh
8	M	そう言われてしまうと　僕とねS君はね　黙っちゃうからね
9	全員	hhhhh
10	M	無駄なことしかやっていないからね　逆にね

11　全員　hhhhh
12　M　逆にね　いかにね　無駄なことを［言うかっていうところで］
13　Y　［そうそうそう　終始］
14　M　終始してしまったからね
15　Y　それはやっぱりね反省
16　M　反省
17　Y　反省として残りますね：：
18　M　楽し：く　楽しくね　つっこみたかったの
19　S　うんまあ　そこは　楽しくやれてたからね

まず、1Tでは、話し合い時の自分の言動について、「俺みたいに空気の読めてない人」と否定的な評価を行っている。ところがYは、「フォローしようとしていたのがねTちゃん」（3Y）と、Tに対して肯定的な評価を与えている。また、6Y以降、YとMは、自分達の言動を「無駄」であったと評価するわけだが、そのやりとりを傾聴していたSは、18Mの「楽しく」という語を受け、19S「楽しくやれていたからね」と、自分を含めたT以外の三者の行動を評価する。つまり、話し合いを推し進めたTも、話し合いに楽しさをもたらしたM・Y・Sも、違った形でそれぞれ話し合いに貢献していたことが共有されることになった。

また、同様の現象は（3）においても確認される。以下、（3）の該当部分を再掲する。

（3）グループ1（女性）　※　一部再掲

17　S　［そうそう］（Kを見て）まとめ役なんだよね
18　T　そう　まとめ役がいないとダメなんだと思う　てか　自然とそれができてると思うの　まとめ役　Kじゃん
19　C　［うん］
20　K　［ほんとに？］
21　T　どう考えても
22　C　そうそう
23　T　時間を気にしたり　話を戻したり
24　K　［hhhh］
25　S　［そう］
26　T　うちらって　ていうか　わたしは　もう　わ：：ってきたときに　ぽんって入って　あははって終わるよ＝
27　K　＝でもね　脱線させるのはわたしだったんだよね
28　T　うそ
29　K　結局
30　C　あ　CanCamとか
31　K　そうそう 脱線しておいて［やばいって戻すから］
32　T　［それにのっちゃうから］

33　C　そうそうそう　うちら乗っちゃう

まず、17S、18Tにおいて、Kは「まとめ役」としての評価を得る。これらは、Kの貢献度を高く認める発話であり他者評価である。ちなみに、Kの貢献度を認める発話は、17Sから26Tまで続くわけだが、その間、Kはあいづち的な発話に終始し（20K、24K）、自身の貢献度に関して、意見を挟むことはなかった。

しかし、27Kに至り、Kは「脱線させるのはわたしだったんだよね」と、先行話題で共有された評価と対立する自己評価をフロアに提示する。この言動からは、評価に値しない自身の言動をあえて提示することで、貢献度のバランスを保持しようとする姿勢がうかがえる。先ほど取り上げた（4）では、否定的な自己評価を行った者に対して、他者からそれをフォローする評価が続いたが、（3）ではそれと逆のプロセスが展開された。

その他、自分の言動を肯定的に捉える際の特徴として、適度な距離感をもってその言動を評価するといった配慮がみられた。例えば、（2）45Kでは、あくまでも「わたしは」という前提条件を付した上で、話をまとめる行為について語っている。ここでの「は」は、対比の「は」であると考えることができるだろう。また、以下に挙げる（5）においても、3Nは「まとめようとがんばっていたかな」と、実際の貢献度はさておき、「自分では」そのような意識があったということを述べている。「って」という引用形式を使用している点からも、自身の貢献に対して、控えめに表現しようとしている意識を推察することができる。

（5）グループ2（女性）

1　N　じゃあ　1番から（2）自分の　話し合いの活動で　なんか 自分の活動で なんかね 自分ではまとめようと

2　M　うん

3　N　がんばっていたかな　っていうのが自分で

4　M　がんばってた　がんばってた

4.2.2　他者に対する評価をめぐって

他者に対する評価については、自身に対する評価との関連で、いくつかの事例を述べた。たとえば、誰かが自分に対して否定的な振り返りをした際は、それを打ち消すような肯定的評価が現れる。（4）では、「話の腰を折って発言した」と自己評価したTに対して、Yが「フォローをしていたのがね　Tちゃんなんじゃないか」と、その認識に相違があることを提示する。また、（3）では、積極的な他者肯定の連鎖がみられ、その際、具体例を述べたり（23T）、自身の言動を引き合いに出し相手の行動を評価したりと（26T）、肯定的評価を支えるいくつかの根拠が示されていた。形式面に関していえば、（5）の4M「がんばってた　がんばってた」のように、語の繰り返しによる肯定的評価の強化がみられた。

以上、既出の例の中から、肯定的評価に関わる表現特徴を指摘した。それでは、他者に対して否定的評価を行う際は、どのようなストラテジーがみられるのだろうか。以下の例では、他者評価に関して、特に注目したい否定的評価を実線、肯定的評価を波線で示す。

（6）グループ2（女性）

1　Y　ほとんど　発話がなくて　ほとんど映ってなくて
2　全員　hhhh
3　K　それはカメラ位置
4　Y　話にうなずいていたりとか、そういうのが多かった
5　N　［うん］
6　K　［うん］
7　Y　はい
8　N　Yちゃんは　基本的に　やっぱり　発言があまりないっていう、最初の方とか特にそうなんだけど　で　【大学名】の味方　とか　あの辺で　やっと　話に乗ってきて　自分の言いたいところは言ってるな　っていうのがあって　その発言は核心をついてるなって思いました

（6）では、1Yと8Nに否定的な評価がみられる。いずれも話し合いに参加する姿勢を低く評価したものである（1Yは自己評価、8Nは他者評価）。だが、8Nに関しては、否定的評価の後に肯定的評価が続き、貢献を認めようとする姿勢が見受けられた。その際、Yの具体的な言動とそれに対する意見を述べ、説得力を高めている。「発言は少ないが、自分の言いたいところは言っている。核心をついている」というNの意見の述べ方は、自己反省をしたYに対するフォローにもなっている。

一方で、（1）26Sのように、否定的評価をおかしみを交えながら伝達する方略もみられた。

（1）グループ3（女性）　※　一部再掲

24　S　採用されない意見とかでも　結構たくさん出てる
25　N　hhh
26　S　くだらない話とか　ポケモンとかポケモンとかポケモンとか
27　N　ごめん　ポケモンは　もう　控えるhhh

26Sが該当箇所である。「とか」は本来異なる事物を列挙する際に用いられる表現であるが、ここでは「ポケモン」を印象付けるため、つまり、印象を強めるために「とか」が用いられている。従来の用法から逸脱することで、おかしみが生まれていることがわかる。親しい関係だからこそ、こうした遊びの中で、否定的評価の伝達がなされるのだろう。

以上、他者評価について、特徴的なやりとりを示した。親しい友人同士の話し合いにおいても、否定的評価の伝達には、何らかの工夫がみられることがわかった。

5．まとめと今度の課題

本稿では、振り返りの話題共有の過程と評価の方略について分析を行った。

まず、振り返りの話題共有のパターンは3パターンあり、いずれも会話参加者の参加が均等

になるような配慮がなされていることがわかった。続いて、自己評価と他者評価がどのようになされているかに注目したところ、相互に評価を重ねながら貢献度を均等にしようとする意識が感じられた。長田（2004）には、話し合いの振り返りの際に「発話機会の保証」が留意すべき点として共有されたという記述があるが、今回の研究から、会話参加者は「貢献度のバランス」にも気を配っていることが明らかになった。

言語的関心における今後の課題としては、まず、話し合いの貢献度の調整について、パターンの整理、体系化を行いたい。次に、参加者の親疎関係を調節することで、親疎関係が影響する相互評価の方略を明らかにしたいと考える。

続いて、キャリア教育において、こうした研究をいかに活かしたらよいかを考えてみる。近年、就職活動の第一次選考において、グループディスカッションやグループワークを取り入れる企業が増えている。その際、いわゆる「目立つ」学生は、積極的に意見を述べる学生と、司会者的な役割を担う学生であろう。しかし、誰もがそのようなことをできるわけではない。むしろ、グループとしてのまとまりを重視するのであれば、発言は少なくても要領を得た発言をしたり、談話展開を俯瞰し、話題が逸れた際に再び生産的な話し合いに導こうとしたりする、そのような学生の存在も大切になるだろう。

そうした気づきを促すために、自身の活動を記録に撮ることを提案したい。今回のように、自身の活動を記録・鑑賞し、振り返ることで、学生達は自己モニタリングの力を身につけることができる。教育的な効果をねらって振り返り活動を実施する際は、事前に留意すべき項目を示しておくとよいだろう。たとえば、表２のような項目が考えられる。

表２　振り返りのチェック項目

【参加態度】	
・話し合いの中で自らの役割を見いだすことができたか	
・話者交替のタイミングや会話参加者の発話バランスに留意することができたか	
・傾聴の姿勢を意識することができたか	
・聞き手の聞きやすさへ配慮することができたか（ことば遣い、発音・発声、話す速度など）	
【言語面】	
意見提示に関して	・先行話題を広げ、深めることができたか
	・話し手の意見に対して何らかの応答を示せたか
	・説得力や根拠を挙げて意見を述べることができたか
	・具体的なレベルから抽象的なレベル、抽象的なレベルから具体的なレベルへと、話題のレベルを調節することができたか
	・否定的評価伝達の際に、聞き手に対して言語的な配慮を示せたか
展開に関して	・話し合いの手順を会話参加者で共有することができたか
	・最終的な目的をみすえたやりとりができたか
	・話し合いの目的が逸れたときに、もとの話題に立ち戻ることができたか
	・話題を随時まとめることで、フロアに出された話題の整理ができたか
【非言語面】	
・話し合いにあたって不必要な動きはしていないか	
・視線・身振り・手振り・うなずき・あいづちなどに留意しているか	
・伝えたいメッセージを非言語の力を借りて表現できているか	

以上、振り返り活動を教育の場に取り入れる際の留意点を示した。グループディスカッション、グループワークというと、構えてしまう学生が少なからずいるが、上記のチェック項目は、そのまま面接官が評価する項目となる。それを知っておくだけでも、学生はこれらの活動に対して心の準備をすることができるのではないだろうか。今後は、このチェック項目を実践の場に取り入れ、学生達の気づきと、その気づきがどのように言語化されて共有されていくのか、言語学的関心と教育的関心の両面から振り返り談話にアプローチしていきたい。

文字化の方法

談話例中のアルファベットは、話し手のイニシャルを示す。また、発話転記の際に用いた記号は以下である。：は音の引き延ばし、［　は発話の重なり、（数字）は沈黙の秒数、hは笑い、？は上昇調イントネーション、（・・）は聞き取り不可の発話、＝は、＝で示された発話の間に間がないこと、【　】内には具体的な名称が述べられていたことを示す。

付記

本稿は、第29回社会言語科学会研究大会（2012年３月11日　於桜美林大学）発表「話し合い後の振り返り場面における話題共有と評価の方略」を、当日の議論及びその後の検討をふまえて、大幅に加筆・改稿したものである。発表当日は多くの方々に有益なコメントを頂戴した。感謝申し上げる。また、本稿は、財団法人博報児童教育振興会による「第２回博報『ことばと文化・教育』研究助成」（研究タイトル：「日本語相談談話の談話分析―相互行為方略・発達過程を観点に」研究代表者：星野祐子）と十文字学園女子大学学内共同研究（研究タイトル：「グローバル社会における大学・短大の表現文化教育の可能性についての研究」研究代表者：東聖子）による成果の一部である。

参考文献

宇佐美まゆみ(1995)．談話レベルから見た敬語使用―スピーチレベルシフト生起の条件と機能―　学苑，662，27-42.

長田友紀(2004)．類似の話題構造をもつ話し合いにおける協同話題構築過程の質的変容―大学院生による第２次・第３次話し合いの予備的考察―　語学文学，42，25-35.

筒井佐代（2006a）．雑談における評価の共有―映画を見たあとの雑談の分析― 言外と言内の交流分野　小泉保博士傘寿記念論文集　大学書林　401-413.

筒井佐代（2006b）．映画を見たあとの会話における問題解決の共有 日本語・日本文化研究，16，11-23.

筒井佐代（2012）．雑談の構造の分析　くろしお出版.

中島悦子（2008）．自然談話に現れるフィラー―自然談話　録音資料に基づいて　アジア・日本研究センター紀要，4，1-23.

初谷和行（2012）．話し合い活動における準備学習やふり返り学習の効果に関する一考察　人文科教育研究，39，55-65.

三牧陽子（1993）．談話の展開標識としての待遇レベル・シフト　大阪教育大学紀要第一部門

人文科学，42(1)，39-51.

注

(1) 具体的には、提示された問題が一方の参加者にとっての問題なのか、両者にとっての問題なのか、また、問題の解決は、一方の参加者によってなされるのか、協働でなされるのか、という点において、そのやりとりの構造や問題の共有のあり方が異なることを示した。

(2) 第１次話し合いは、俳句のグルーピング、第２次話し合いは、第１次話し合いの振り返り、第３次話し合いは短歌のグルーピングである。

(3) Sの手元のメモを指さし、他者への振り返りが残っていることを指摘。

(4) 中島（2008：19）では「ハイ、エエ、ウンは発話末に現れて、その発話が終了したことを明示する。発話終了を示すフィラーとして機能する」と指摘されている。

(5) 新話題への移行の際に、スピーチレベルシフトが起こることは、三牧（1993)、宇佐美（1995）等で指摘されている。